

ROSSI 四季報

RiTS

2002年6月

第 17 号

Research Organization of Social Sciences (立命館大学BKC社系研究機構)

CONTENTS

〈巻頭言〉 機構長就任にあたって	古川 彰 ……1	プロジェクト研究の総括 —成果と反省—	中村 雅秀 ……7
研究開発活動において 「反共有地の悲劇」は発生するか?	大川 隆夫 ……2	連結財務分析プロジェクト2001年度の 研究活動と成果の概要及び研究成果	松村 勝弘 ……8
1年間のプロジェクト研究活動を ふりかえって	大川 昌幸 ……3	国際シンポジウム:「確率過程論と 数理ファイナンスへの応用」を振り返って	赤堀 次郎 ……9
2001年度プロジェクト活動報告	安藤 哲生 ……4	経営戦略研究センターの 2000~01年度の活動をふりかえって	奥村 陽一 ……10
非営利サービス事業組織の マネジメントの研究	齋藤 雅通 ……5	確率過程と数理ファイナンス	渡辺 信三 ……11
日中小企業協力研究プロジェクトの 2001年度活動報告	仲田 正機 ……6		

巻頭言

立命館大学BKC社系研究機構
機構長 古川 彰

機構長就任にあたって

本年4月から、平田純一教授の後任としてBKC社系研究機構長に就任いたしました。私が立命館大学に参りましたのは2000年4月からで、以前は旧経済企画庁で経済分析や経済政策の立案に携わっておりました。2年経ってもこの業界(学界)にはさっぱり門外漢ですが、関係各位にご指導いただきながら機構長の職責を果たしてまいりたいと思っております。

東京におりました時から、立命館大学の産官学連携の積極的推進は、世の注目を集めておりました。本学に移るにあたって、当然そのことは念頭にあったわけですが、これまでそうした仕事にはノータッチで、所詮は理工系だけの話かと思っておりました。このたびBKC社系研究機構長を仰せつかり、実際のプロジェクトについて同うと、官公庁の資金による先端的研究はもとより、まだ少数ながら、企業のマーケティングや商品開発にかかわるリエゾン活動など、社系には無縁と思っておりました分野でも連携プロジェクトを推進している先生方がおられることに感銘を受けた次第です。今後も、関係各位の築かれた蓄積の上になって、プロジェクト研究や産官学連携のプロジェクトを推進していきたいと考えております。とは申しまして、企業との共同プロジェクトについては、社系ではおのずと限界があるし、教員にも熱心な方は限られているようです。そこで、先生方の参加インセンティブを高めるよう制度的改善を検討していくとともに、教育面で企業との連携講座のようなプログラム開発にも力を入れ、教員・学生の関心を広げていくことが重要かと考えております。

官庁時代の研究活動といえば、経済企画庁の経済研究所に計3回、通算6年ほど在籍し、計量モデルや規制改

革に関する米英との共同研究に携わるとともに、研究所全体のマネジメントも行いました。また、旧郵政省が80年代後半に郵政研究所を設立したとき、経済・金融の研究部長として出向いたしました。このときはまったくゼロからの立ち上げで、集められた郵政省プロパーの研究員や民間企業からの出向者も、およそ研究経験などゼロ。大学の先生方にもご指導いただいて、ちょうど大学のゼミのような形で、先行文献を勉強しながら実証分析をオン・ザ・ジョブ・トレーニングする、という調子でした。新生の研究所だけに、試行錯誤ながら白地に絵を描くように研究の分野や方法を決めていくことができ、資金面や事務サポート体制も手厚く手当てしていただいて、官庁勤めで最も楽しい経験をすることができました。

そうは申しまして、世の官民の研究所は、おのずと研究テーマはある程度所与となっております。結論も先に与えられている場合が多いでしょう。いわば「社会人入学」した私のような人間は、何でも浅く広くやっけてきているので、大学での研究はテーマの選択に悩みます。先行業績のサーベイも苦勞するところです。世の中の研究所が大学の若手の先生方を客員として招聘して研究プロジェクトを行う場合、仮に研究員が分析作業を皆やってしまう場合でも、先生方に最低限期待するのは、この先行業績サーベイの部分でしょう。

というわけで、研究といっても産官学でそれぞれに必ず比較優位があるわけで、社系でも理工系でも、連携した研究の可能性は大いにあるはずだ、というのが、今の段階での私の感想です。